

# The Location Around The World

行ってみたいな名作の舞台へ…





■マイケル・フランクス「バーチフィールズ・サイン」のジャケットにあるオブジェ

## 「ティファニーで朝食を」 記念写真は、ちょっと勇気がいるかも

②ニューヨーク・5番街(アメリカ)

さて、今回から、今まで採りあげたことのないアメリカ、ニューヨーク。ロケ地を巡りはじめるとLAに匹敵するほど、名作の舞台には事欠かないが、やはりまず、この作品から始めることにしよう。

押しも押される世界一の大都市、ニューヨーク。その煌びやかで、オシャレで、それでいてどこかアンニュイで空虚なライフスタイルを描いた名作中の名作…といえば、やはり「ティファニーで朝食を」(1961)。なんといってもハイライトは冒頭、5番街ティファニーのショーウィンドーで、オードリー・ヘップバーン扮するホリー・ゴライトリーが宝石を見つめながらパンとコーヒーで朝食を食べるシーンが印象的だ。このワンシーンだけで、その時代(ある意味、今も変わっていないが…)の人間の虚栄心や空虚さを表現している気がする。さて記念写真を…といっても、やはり高級宝飾店だから、ショーウィンドー前でパンを食べながら(?)記念写真を撮るのはちょっと勇気がいるかも。

イーストサイド71丁目に行けば、ホリーの部屋、そうそう、あの妙な日本人も住んでいるアパートメントが今もそのまま存在する。もったも、映画の時のようなストライプの日よけはなくなっているが…。

ニューヨークは大都市では珍しく、どこを切り取っても本当に絵になる街。ティファニーから西へ1ブロックほど歩くと、でっかい「9」のオブジェに出くわす。歌手マイケル・フランクスの名盤「パーチフィールド・ナインズ」のジャケットデザインにもなっているものだ。

「ニューヨークって、どこが素晴らしいの?」と聞かれても答えに窮するが、とにかく訪れて見て欲しい。そうすると、東京や大阪との違いを肌で感じるはずだ。





■ホリーのアパートメント



■左側のショーウィンドー前でパンを食べた



■これもNYの一つの顔

## マリリンのスカートが舞い上がる 伝説的なシーンは、ここで生まれた

②3 ニューヨーク・レキシントン・アベニュー(アメリカ)

ニューヨークロケ地巡り2回目。前回のオードリー・ヘップバーン主演「ティファニーで朝食を」を採り上げると、往年の映画ファンのためには、やはりこの作品を採り上げないわけにはいかない。ピーター・ワイルダール監督、マリリン・モンロー主演のお色気コメディの傑作、「七年目の浮気」。

映画を見たことのない人でも、あの、マリリンのスカートが舞い上がる、超有名なシーンはご存じだろう。地下鉄の通風口の風にスカートが舞い上げられるわけだが、宣伝用に撮影された時には2千人以上の見物人が集まり、舞い上がるスカートに歓声を上げたそうだ。今ならそれほど「いやらしい」わけでもないシーンだと思うのだが、その当時(1955年)にはアメリカでもエポック・メイキングな出来事だったのだろう。事実、そのシーンに、当時の夫NYヤンキースのジョー・ディマジオが激怒し、離婚したと言われているほど。そんな日く付きの現場は、「ティファニー」にもほど近いレキシントンAve.52丁目の角。映画では映画館の前だったが、今はその映画館も移転。映画史上に残る伝説的なシーンのロケ地とは思えないくらい何事もなかったように、通風口だけがひっそりとたたずんでいる。南の方角には、あのエンパイアステートビルと並ぶNYの超高層ビルの傑作、クライスラービルが間近に見えるので、それをバックに記念撮影がおすすめ。冬場は蒸気が立ち上り、ニューヨークらしいカッコいい写真が撮れる場所でもある。

マリリンとトム・イーウェルが住んでいたアパートもセントラルパークの東側、164イースト61丁目に今なお健在。前回の「ティファニーで朝食を」のロケ地とも密接しているので、ご年配の映画ファンにはうれしい。でも「ここがロケ地です!」みたいな表示はどこにもないので、探すにはちょっと苦労するかも。とはいえ、大都市なのに探せばあちらこちらに、50年以上も前に撮影された建物などが残っているなんて凄いこと。ほんと羨ましい限りだ。





■誰も気付かないロケ地の通風口…



■アパートは今でも残っている



■消火栓が絵になるのもNYならではの



## 「ユー・ガッタ・メール」のメグみたいにチャーミングな女性が恋に落ちる街、NYアッパー・ウェストサイド

②4 ニューヨーク・アッパー・ウエスト・サイド(アメリカ)

今回は比較的最近の作品をご紹介します。1998年、トム・ハンクス、メグ・ライアン主演の「ユー・ガッタ・メール」は、私もお気に入りのほのぼのラブ・コメディ。ご存じの方は少ないかも知れないが、実はこの作品はリメイク版でれっきとしたオリジナル版がある。遠い昔1940年製作の「THE SHOP AROUND THE CORNER (邦題:街角 桃色の店)」がそれ。ジェームス・スチュアート、マーガレット・サラバン主演、都会派コメディの名手エルンスト・ルビッチ監督がメガホンを執った秀作ラブ・コメディ。ブダペストの雑貨店を舞台に文通で知り合った二人が織りなすロマンティックでコミカルなストーリーはまさに「ユー・ガッタ・メール」そのもの。DVDも発売されているようなので、お時間のある方はぜひ見比べてみて欲しい。そのオリジナルに惚れ込んだノーラ・エフロン監督が妹のデリアと脚本を共同執筆、ブダペストをニューヨークに、文通をEメールに現代風に見事に書きかえた。

舞台となるのはセントラルパークの西側、アッパー・ウェストサイドと呼ばれるエリア。ハドソン川に面したNYとしては比較的閑静な場所にあり、若い人を中心にニューヨーカーには今、人気の住宅地だ。本作品はこのエリアで多くのロケ撮影が行われた。特に喫茶店などは実名で登場しているので、散策かたがた訪れるのも楽しい。DVDでは、ロケ地の紹介も付録でつけられているので、それを参考に訪れてみると比較的探しやすいかも。

まず、トム・ハンクス演じるジョンがレジでピンチのキャスリーン(メグ・ライアン)を助けるスーパーマーケット「ZABARS」。NYでも有名な高級食材スーパーだそうだが、カジュアルな店構えで気軽に入れるのがうれしい。そして逢ったことのない二人が、意を決して待ち合わせをするカフェ「Café Lalo」。夜には映画のシーンように木々にイルミネーションが燦めいていてロマンティックそのもの。チーズケーキが結構いけるとの噂なのでぜひトライを。毎日二人が通っていたお決まりのスターバックスは、81St.とブロードウェイの交差点。…と、徒歩エリア内に集中しているのでロケ地巡りをするのにはとても効率的。晴れた週末なんかだと静かで、気持ちのいい散歩気分が廻れる。そして極めつけが、フィナーレのシーンの場所。「いつか王子様が」をバックに、二人が初めて(?)出逢う花壇が、ハドソン川沿いのリバーサイドパーク内にある。91st. GARDENと名付けられたこの公園は、映画のように色とりどりの花壇が美しい。ベンチに座ってハドソン川を眺めていれば喧噪のNYにいることも忘れてしまいそうな気分。あと、メグ・ライアンみたいにチャーミングな人が横に現れてくれれば、完璧! でも、それはただの妄想に終わってしまいました…私の場合。



■キャスリーンを助けるスーパー「ZABARS」



■「Café Lalo」は人気店



■キャスリーンの家はこの辺りのはずだが、うまく見つけれなかった



■牛乳を買う雑貨店とレオン/マチルダのアパートメント

## ハードボイルドな「レオン」には、ニューヨークの下町がよく似合う

②⑤ニューヨーク・リトルイタリー(アメリカ)

フランスが誇る名監督、リュック・ベッソンが初めてハリウッド作品に臨んだ記念すべき作品「レオン」(1995)。ジャン・レノと若き日のナタリー・ポートマンの名演技が光る素晴らしい作品だ。舞台はNYロワー・マンハッタン of イタリア人地区、リトル・イタリー。すぐ南のチャイナ・タウンと同じく、新大陸にやってきた移民たちが形成した街で、かつては「ゴッド・ファーザー」でも有名なマフィアも闊歩していたのだろうが、現在は徐々にチャイナタウンに飲み込まれるようにエリアは縮小。現在のNYでは観光客も多いエリアで、マルベリー通りやグランド通りには美味しいイタリアン・レストランが軒を連ねる。「チャオ!」と、イタリア語が飛び交い、まるでローマにでもいるムードだ。

そんなリトル・イタリーのレストランから物語は始まるが、実際のロケ地であるレストランはリトル・イタリーにはない。ミッドタウン南の38丁目と9番街の交差するあたりにあるSupreme Macaroni Coがその場所。そしてレオンとマチルダが暮らしていたアパートの外観は、遙か北のパークAve.と97丁目の角にあり、マチルダが牛乳を買いに行く雑貨店の左にアパートの入口がある。この辺りは今でもちょっと危なっかしい感じ。らせん階段が印象的なアパート内のシーンはチェルシー地区23丁目の7番街と8番街の間にあるチェルシーホテルで撮影された。極悪人の麻薬捜査官、スタンフィールドが居る麻薬取締局のビルは、シビックセンターにあるマニシパル・ビル。復讐を決意したマチルダが、レオンにライフル射撃を教わるシーンで、ジョギング中の人を狙うのはセントラルパークのパインバンク・アーチ付近。そしてレオンが死んだ後、失意のマチルダが再起を決意し寄宿舎に戻る時に乗るのがトラムウェイ。60丁目2番街の交差点に乗り場があり、ルーズベルト島に行ける。このロープウェイも「スパイダーマン」など、しばしば映画に登場。ちょっとくたびれた駅と、クラシカルな車両?は何ともいえない味わい。巨大なビルボードをバックにすると、「いかにもNY!」という感じの写真が出来上がる。カメラが上手くなくても、結構かっこいい写真の撮れる街、それがNYだ。

しかしこの映画、その他の多くのシーン(特に屋内)はベッソン監督の本拠地、パリで撮影されたという。やはり勝手知った場所の方が撮影しやすかったのだろう。しかし、そんなことを微塵も感じさせないカット割りや編集の妙はさすが。当時(設定は多分、80年代?僕も初めて訪れた1989年でも怖かった!)のNYの危なっかしさやリトル・イタリーの雑然とした雰囲気が見事に伝わってくる。何度見ても飽きない作品のひとつだ。



■ 寄宿舍へ戻るトラムウェイ



■ リトルイタリーはいつも賑やか



■ NYのオアシス、セントラルパーク

# 世界一エキサイティングな街、NYでは オバケ退治もビジネスになる??

②6 ニューヨーク・ミッドタウン(アメリカ)

気がつくと今回でニューヨークばかり5話続いていますが、ロケ地としての話題だけでも尽きることはないのがこの街の魅力。ロマンスあり、コメディあり、バイオレンスあり…何でもありの世界一エキサイティングな街NYには、オバケだってわんざわんざという??レイ・パーカーJrが歌うキャッチーなテーマソングがヒットした「ゴーストバスターズ」(1984/監督:アイヴァン・ライトマン)は、NYを舞台にした傑作娯楽作品だった。最近では「ナイト・ミュージアム」などがテイストは近いが、実にアメリカらしい演出が際だっている。パトリック・スウェイジ、デミ・ムーア、ウーピー・ゴールドバーグ主演の「ゴースト ニューヨークの幻」(1990)など、幽霊を洒落たシナリオでロマンチックに表現するのもいいけど、「ゴーストバスターズ」みたいにハチャメチャに楽しく描く方が、やっぱりアメリカっぽくて好きだ。

物語が始まるのは、ミッドタウンにあるニューヨーク公立図書館。ここで最初のゴーストが現れて、ビル・マーレイ、ダン・エイクロイド、ハロルド・ライミス演じる、冴えない科学者たちが見事に退治。そこから新ビジネス「ゴーストバスターズ」が誕生するのだが、その事務所となるのがライベッカ地区にある消防署を借りて撮影が行われた。映画では「バスターズ出動!」に消防署に欠かせない鉄棒(?)を使っているようだ。彼らが勤めていてクビになった大学は、アッパーウエストのコロンビア大学。巨大なマシュマロマンが歩き回り、市民が逃げ惑うのは、セントラルパークの南側にあるコロンバスサークル周辺だ。この辺りには観光客用の馬車があって、誰でも乗ることができる。

そうそう、NYでは騎馬警官をちょくちょく目にするところがあるが、大渋滞の大通りを悠々と闊歩する騎馬警官はカッコいい!東京の警視庁にはあるらしいが、あまり見かけたことがない。もっと、どんどんやればいいのにとと思う。

ま、何でもありのNYだが、映画のロケ地という意味でも、巡り始めるとLAと同じくらいキリがない。今でもどこかでロケが行われ、運が良ければそんな場面に出くわすことが出来るかも。目印は、役者たちやスタッフが詰めているロケバス。こんなロケバスを見つけたら、周りを注意して探してみよう。ロケ地を巡るツアーも盛んで、今やインターネットで簡単に申し込んで参加できる。世界一エキサイティングな街NYはやっぱり、いつでもワクワクする街だ。





■最初のゴーストが出たニューヨーク公立図書館



■マシュマロマンの出現したコロムバスサークル



■NYには馬車がよく似合う



■これもNY。パーク・アヴェニューの中央分離帯のチューリップ



■NYと言えばブロードウェイのミュージカル



■下積み時代のダスティン・ホフマンがバイトしていたカフェ



■NYは89年、好きなアール・クルーのレコーディングを見学できた思い出の場所。この写真は宝物



## サンフランシスコで生まれた、名作中の名作 それはヒチコック監督の「めまい」

③5 サンフランシスコ(アメリカ)

アメリカ西海岸、サンフランシスコを訪ねてみよう。LA(ロサンゼルス)からさほど離れていないので、映画のロケ地としては様々な作品が撮影されているが、霧の多い天候はLAに比べると分が悪い。とはいえ、LAよりも歴史があり、建物などにもトラディショナルな趣きを感じられる街角はいい。特に、今もレトロなケーブルカーが行き交う坂道は最高だ。

そんなサンフランシスコを舞台にした名作といえば…筆者としては、なんといってもアルフレッド・ヒチコック監督の「めまい」を1作目に挙げたい。1957年発表というから、筆者もまだ生まれていない時代の作品だが、1996年にリストアされたこともあってDVDなどは名実ともに色褪せていないミステリー傑作中の傑作として蘇った。クライマックスともいえるスペイン風教会のシーンなどは、スタジオに鐘楼を作って撮影されたが、数多くのロケ撮影がサンフランシスコの街中で行われた。

まずキム・ノヴァク演じるマデリンが住んでいる豪華なアパートメントは、ノブ・ヒルにあるブロックルバンク・アパートメント。今も当時と変わらない姿である。すぐ南には、マデリンに変身するジョディが住んでいたホテル・エンパイアがある。今は、ヨーク・ホテルと名を変えているが、よく見るとエントランスや窓は映画のシーンのままだ。そして、部屋からコイトタワーの見える主人公スコティの家は、「世界一曲がりくねった坂道」で有名なロンバード・ストリートを下ったジョーンズ・ストリーの角にある。

マデリンがサンフランシスコ湾に飛び込むシーンは、あまりにも有名なゴールデン・ゲート・ブリッジの橋脚のたもと。ただしスコティが彼女を助け、海からあがる階段はスタジオ・セットで、実際には存在しない。カルロッタの絵があった美術館は、リンカーン・パークにあるカリフォルニア・パレス・オブ・ザ・レジョン・オブ・オナーという長つたらしい名前の美術館。ダウンタウンから少し遠いが、ルノアールなどの印象派を中心にした本格的な絵画美術館で、白亜の建物がヨーロッパ的な雰囲気だ。カルロッタの墓があった墓地は、ドロレス・ストリート沿いにある聖フランチェスコ伝道協会の裏。サンフランシスコの名は、この教会がルーツだとか。

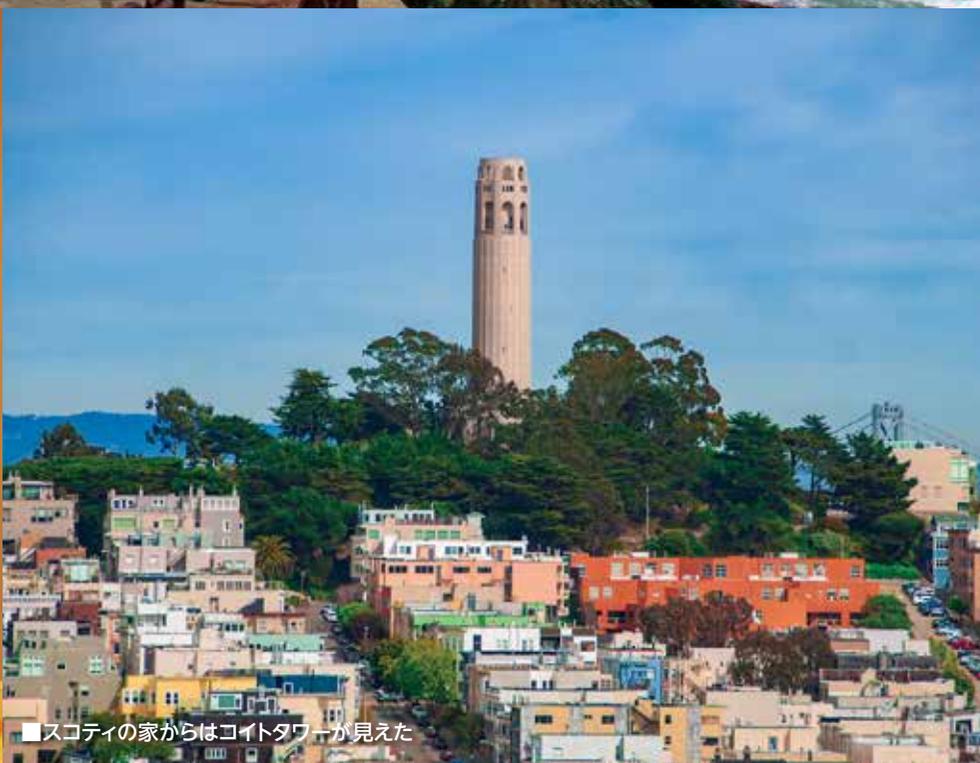
このように数多くのロケ地が点在しているので、地図で見ている時はいいが、実際に歩くと坂道が多くて少し辛いかも。くれぐれも「めまい」を起こさないように、ゆっくりと廻って欲しい。



■これぞ、霧のサンフランシスコ



■カルロッタの絵があった美術館



■スコティの家からはコイトタワーが見えた

# 「アルカトラスからの脱出」の舞台 アルカトラス島は必見の観光ポイント

③7 サンフランシスコ(アメリカ)

サンフランシスコ観光で、外せない人気ツアーのひとつにアルカトラス島巡りがある。ここでは、かつてアルカトラス刑務所として実際に機能していた島。その厳重な警備とサンフランシスコ湾の激しい潮流のおかげで、絶対に脱獄できない刑務所として1934年開設以来、無数の囚人たちを収監し、かの悪名高きギャング王、アル・カポネも囚われていたという由緒正しき(?)刑務所だ。

しかし、そんな鉄壁の牢獄も1962年6月11日、天才的な強盗犯フランク・モリスら3人によって、ついに脱獄されてしまう。彼らの生死は結局確認されなかったが、生き延びてひっそり暮らしていた?という説もある。それを機に、ついに1963年には時の司法長官ロバート・ケネディの命により、アルカトラス刑務所は閉鎖されることになる。

そんな実話に基づいて作られたのが、ドン・シーゲル監督、クリント・イーストウッド主演の「アルカトラスからの脱出」(1979)だ。この映画は、実際に刑務所が封鎖された後、国立公園として観光地化された刑務所跡地でほとんどのシーンがされたという。決して派手な映画ではないが、実話ベースならではの真実味を感じることができる。現地では、映画に出てくる牢獄はもちろん、食堂や運動場など見覚えのある場所が点在している。そんな映画のロケ地ということもうれしいが、それより実際にここに多くの囚人が収監され、フランク・モリスも実在し実際に脱獄した形跡が間近に見れることも一種の感動だ。よくもまあ、2年もかけてスプーンで壁を削り脱獄したという努力には脱帽してしまう。

フィッシャーマンズ・ワーフ・ピア33から出ている観光船で簡単に行くことができるが、人気のあるツアーなのでチケットは<https://www.alcatrazcruises.com>で要チェック。帰りにはやっぱりピア39にある本家フィッシャーマンズ・ワーフで、クラムチャウダーやでっかいパンに入れてくれるシーフードを食べるのがGoo!次回はもう一つのアルカトラス作品「ザ・ロック」だ。





■島まではツアークルーズ船ですぐ



■檻の前で記念撮影



■元祖フィッシャーマンズ・ワーフはシーフードが安くうまい



■刑務所映画でお決まりの運動場



■鳥たちもアルカトラスを見学に来た？



■本土はすぐそこだが、潮流が急で脱獄が超難解だったらしい



■味のあるシェビーのピックアップトラック

## 手に汗握るスリルの連続がたまらない アルカトラズを舞台にした「ザ・ロック」

③8 サンフランシスコ(アメリカ)

クリント・イーストウッド主演「アルカトラズからの脱出」と並び、サンフランシスコの元アルカトラズ刑務所を舞台にした人気作品が、ショーン・コネリー主演の「ザ・ロック」。前作が実話をベースにしていたのに対し、「ザ・ロック」は、フィクションベースのアクション娯楽作品。軍に不満を持つアメリカ海兵隊の伝説的英雄ハメル准将たちが、猛毒の化学兵器を奪いアルカトラズ島にツアー客81人を人質にして立てこもる。そしてサンフランシスコ市内に照準を定めて政府に要求を出す。それを阻止するために活躍するのがFBI化学兵器スペシャリスト、スタンリー・グッドスピード(ニコラス・ケイジ)と、かつてアルカトラズから脱出した経験を持つ英国諜報部員のジョン・パトリック・メイソン(ショーン・コネリー)。英国諜報部員でショーン・コネリー…とくれば否が応でも思い起こされるのが「007」。このあたりは洒落っ気たっぷりだ。

実際の撮影はアルカトラズ島内ではごく一部の外観や独房シーン以外の撮影許可がおりなかったようで、スタジオで撮影されたそう。それでも随所でアルカトラズらしいシーンがでてくる。

またサンフランシスコ市内には数々のロケ地を見つけることができる。メイソンがリクエストしたスイートルームのあるフェアモント・ホテルはノブ・ヒルに実際のある高級ホテルで、ヒチコックの「ファミリー・プロット」にも登場している。その後のカーチェイスは、ロシアン・ヒルで撮影。名物のケーブルカーと衝突して派手にクラッシュ!が印象的だ。メイソンが娘と会うロマネスク様式が見事な建物は、ジェファーソン・ストリートとベイ・ストリートの間にあるパレス・オブ・ファイン・アーツ。1915年のパナマ太平洋万博のパビリオンとして建てられ補修・改修されたものとか。ここからクリッシー・フィールドを通過してゴールデン・ゲート・ブリッジまでの海沿いの公園エリアは爽やかそのもの。カリフォルニア・スタイルを気取ってローラースケートや自転車に乗って、あてもなくのんびりと過ごしてみたい。





■派手にクラッシュするケーブルカー



■テラスで散髪したフェアモント・ホテル



■パレス・オブ・ファイン・アーツは絶景

# サンフランシスコ出身のイーストウッドが わが街で暴れ回る「ダーティ・ハリイ」

③9 サンフランシスコ(アメリカ)

サンフランシスコを舞台にした最近の映画で絶対外せない人気作品といえば「ダーティ・ハリイ」(1971)。サンフランシスコ出身のクリント・イーストウッドを一躍アクション・スターとしてその名を不動のものとした刑事アクション映画の傑作だ。ハード・ボイルドな刑事ハリイ・キャラハンに世界中の人々がしびれ、悪を憎んで少々行き過ぎてしまう警察官のことを称する「ダーティ・ハリイ症候群」なる心理用語まで生んだというから凄いことだ。

1971年の第1作から1988年に至るまで、シリーズ5作が世に送り出されたが、やはり文句なく第1作目の「ダーティ・ハリイ」がイチオシ。そのほとんどのシーンが、サンフランシスコでロケされたというが、だとしても素手に40年近い歳月が経っているので、取材・撮影前は正直少し心配だったが、印象的なロケ地はそのまま残っていた。スコープオが市民を狙撃してはじまる冒頭のシーンで狙撃場所となった高層ビルはカリフォルニア・ストリートのバンカメ世界本部ビル。ハリイらが呼ばれた市長室のシーンはセットではなく、本物の市庁舎の市長室だそうだ。休日だからとはいえ、映画撮影に市長室を提供してくれるところがさすがに映画の国アメリカならではの。

最初の黒人と新譜の殺人未遂シーンで登場する美しい教会はフィルバート・ストリートにある聖ピーター・アンド・ポール教会。映画と同じように、前に広がるワシントン・スクエア・パークの緑が美しい教会だ。

その後、身代金を手にハリイが市内を駆けずり回るシーンで、最初に駅に駆けつけ電話をとるのがフォレスト・ヒルズ駅。うれしいことに今も、当時のままの公衆電話が構内にある。そしてスコープオに襲われ、チョコと共に瀕死の重傷を負うのはサンフランシスコで最も標高の高い丘、マウント・ディビッドソンが舞台だ。

改めて「ダーティ・ハリイ」をDVDで見ると、少しも色褪せていないこの作品の素晴らしさに驚くばかりだ。多分、若い世代の読者はこの名画を知らない人がいるかも。そんな方は、ぜひともハードボイルド刑事アクションの傑作中の傑作を見ていただきたい。





■聖ピーター・アンド・ポール協会



■ハリリーが受けた公衆電話のあるフォレスト・ヒルズ駅



■最初の狙撃地はバンカメ世界本部ビル



## 「めまい」にインスパイヤーされている、 「氷の微笑」も舞台はサンフランシスコ

④0 サンフランシスコ(アメリカ)

サンフランシスコを舞台にした作品で、ハードボイルドの代表作が前作の「ダーティ・ハリー」、そしてミステリーの代表作は以前に紹介したヒチcock作「めまい」だと筆者は思っている。その「めまい」にインスパイヤーされて作られたのが、ポール・ヴォーホーヴェン監督、シャロン・ストーン、マイケル・ダグラス主演の「氷の微笑」(1992)で、「めまい」と同じく霧のサンフランシスコで撮影された。エロチックでミステリアスな脚本・演出が話題となり、全世界で3億5000ドルを超える大ヒットになった。

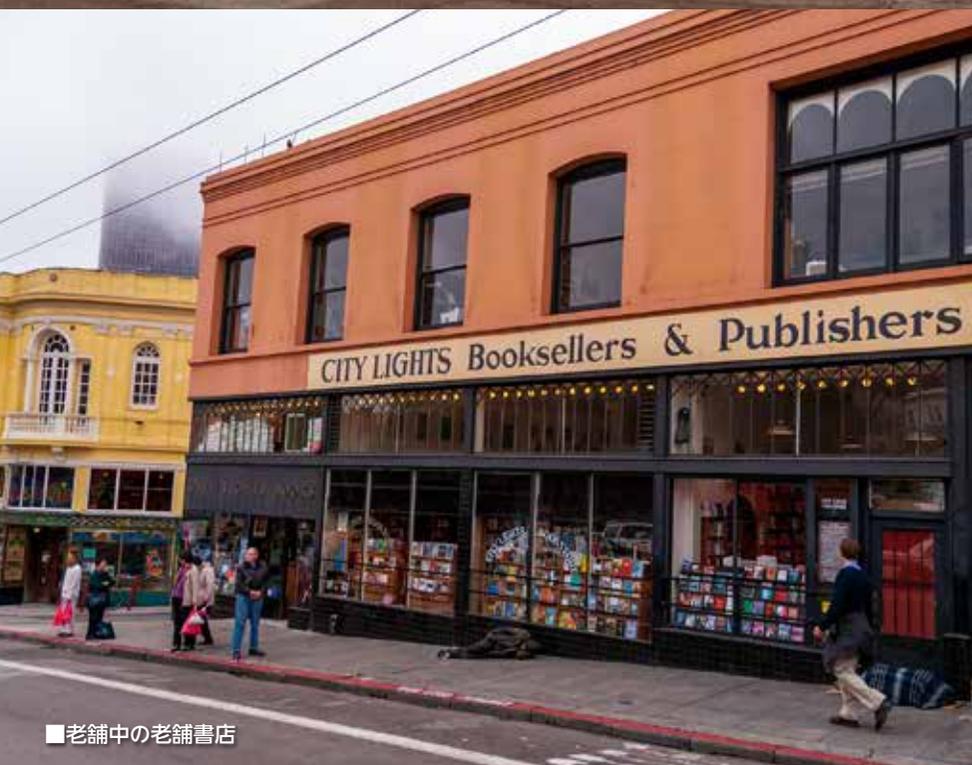
「めまい」のキム・ノヴァク演じるマデリンのどこか通じる謎めいた雰囲気、堪らないほどのセクシーさをプラスさせたシャロン・ストーン演じるキャサリン。そんな彼女を尋問した後で、マイケル・ダグラス演じる刑事ニックが思わず禁酒の誓いを破るバーがコロンバス・アベニューの「TOSCA」。メディア関係者が集まる高級なバーらしい。ちょうど辻向かいには映画「ビートニク」にも登場した世界的に有名な書店「CITY LIGHTS」がある。ローレンス・ファーレンゲッティ氏が1953年にオープンし、ここから始まった西海岸カウンターカルチャーのムーブメントの中心地として世界に名を馳せた後もチェーン展開化することなく、今だにただ1店舗だけで営業してる。

刑事ニックが暮らすアパートは1158,モンゴメリー・ストリートの坂を上ったところにある。ちょうどシャロンが座っていた入り口もそのまま。なんだか妙に艶めかしい雰囲気が辺りに漂っているように思えたのは霧のせいだけだろうか…。内部はこれまた「めまい」のオマージュなのか、クライマックスシーンの教会の階段にわざと似せたようならせん階段になっている。

ちょうど取材・撮影に向かった日が名物の霧に包まれていたので、ミステリアスな作品の舞台がよりミステリアスに感じてしまったが、サンフランシスコはハードボイルドやミステリーだけが似合う街ではない。太陽が燦々と降り注ぐ日には、やはりカリフォルニア州ならではの、ホンワカ楽しい映画の格好の舞台でもある。次回はそんな楽しい作品のシスコを紹介しよう。



■曇天の霧が似合っている…街。僕はピーカンがいいです



■老舗中の老舗書店



■シャロンが座っていた入り口もそのまま



## 「ミセス・ダウト」「プリティ・プリンセス」… 楽しい映画も似合うのがサンフランシスコ

④1 サンフランシスコ(アメリカ)

ヒチコックの「めまい」から「氷の微笑」、「ダーティ・ハリー」…と、サンフランシスコを舞台にした映画はハード・ボイルドやミステリー作品が何故が多い。坂道の多さがカー・アクションにもってこいなのか、名物の霧が謎めいたイメージにぴったりなのか…でも、晴れた日に街中を散策すると、そんな危なくミステリアスな雰囲気のある街ではない。楽しい映画だって数多く撮影されている。

まずロビン・ウィリアムスがファニーな家政婦に変装するコメディ「ミセス・ダウト」(英語名:Mrs. Doubtfire)の家を訪れたい。スタイナー・ストリートとブロードウェイの角に、その家は映画そのままの姿で建っている。もっとも一般の方が今も生活されている家なので、記念撮影などは迷惑にならないように気をつけて。近くのバシフィックハイツには、アン・ハサウェイ主演の「プリティ・プリンセス」の撮影が行われた女子校ハムリン・スクールもある。坂を下って(といいながら、東西南北至る所がアップ・ダウンの坂道だが…)ゴールデン・ゲート・ブリッジが見渡せる緑地クリッシー・フィールドはダウトファイヤーばあさんと子供たちがサッカーや自転車で遊ぶ公園。いつでも多くの人が思い思いのスポーツや遊びに興じている。

そこから3キロほど東にあるのが観光地として有名なフィッシャーマンズ・ワーフ。ガイドブックにもあまり載っていないが、その一角ピア45にひっそりとあるゲームマシン博物館には、昔懐かしいゲームセンターのマシンの数々が展示されている。ここで「プリティ・プリンセス」の主人公ミアがジュリー・アンドリュース演じる祖母のジェノバ女王と羽目を外して遊ぶという心温まるシーンが撮影された。

そのほかにもジェニファー・ロペス主演「ウェディング・プランナー」、メグ・ライアン、ニコラス・ケイジ主演「シティ・オブ・エンジェル」、エディ・マーフィ主演「ドクター・ドリトル」…など、サンフランシスコが舞台となって楽しくロマンティックな作品も数え出すとキリがない。LAよりは歴史的な建物が多く、筆者もアメリカの中では好きな街のひとつである。ただ…取材・撮影には、名物の坂道がちよいとキツイ。次回はレンタカーを使おうかなあ…。



■ダウトファイヤーばあさんが働く家



■グリッシー・フィールズは市民の憩いの場所



■フィッシャーマンズ・ワーフは観光客でいっぱい



Bath Salts

at Pier 39



■いろんなトラムが走っていて見てて飽きない





■これぞフィッシャーマンズ・ワーフの写真

# The Location Around The World

## volume 3 (New York/San Francisco)



All pictures and texts were published on Japanese newspaper article to introduce splendor of each sites. These are not commercial content, but only editorial use, Therefore we never invade a right of personal portrayal, any rights of structures. And this edition is only my private memories. Please accept it.

not for sale